

■ 農業機械の改良に尽くした偉人 谷岡 壽 男

□ 農機顕頌(のうきけんしょう)の碑

真狩村公民館の近くに「農機顕頌の碑」という石碑が建っています。この碑は昭和36年(1961年)11月に、農業の発展に尽力された谷岡壽男(たにおか としお)氏を称えて建てられたものです。谷岡氏は明治41年(1908年)に真狩村御保内で生まれ、18歳のときに、伊達の農機具工場で修業し、農機具の改良に努められました。

当時は農機具の製法を工場関係者にも秘密にする時代で、耕起するための機具である「プラウ」の鋼部分の作り方は絶対に教えてくれませんでした。そこで谷岡氏は何としてでも「プラウ」の鋼の製法を知りたいと思い、親方がその仕事を始めると昼夜を問わず壁に耳をあて、どのように作っているかを音で知ろうと懸命な努力を重ねられました。

□ プラウの改良

毎日のつらい仕事のかたわら、農機具改良の努力が実って、昭和5年(1930年)、ふるさと真狩村に戻って工場を建て、農機具の製作を開始、まず取り組んだのはその「プラウ」からでした。谷岡氏が目指した「プラウ」は、丈夫でどんな場所でも楽に鋭く土を掘り起こすものでした。これを作り上げることで、農作業がもっと楽になることを願ったのです。考えが浮かぶと作ってみて、農家の人に頼んで使ってもらい、その意見を聞いてまた作り直すという作業が、何度も繰り返されました。

ある日、谷岡氏は鋼に炭素を入れることを思いつきました。

そして、さっそく作り上げて農家の人に使ってもらったところ、今までのどんな「プラウ」よりも丈夫で鋭く土を掘り起こすことができ、谷岡氏の願いはついに実を結んだのです。

この、「谷岡式プラウ」は昭和11年(1936年)に、天皇が来道され、全道各地で作られたプラウをご覧になられたとき、「あなたのプラウが一番すばらしい」というお言葉をいただきました。そして、谷岡氏にとっては、何より畑起こしが楽になったという農家の人々の声が、一番嬉しかったことに違いありません。

谷岡氏の農機具への情熱は「プラウ」だけにとどまりませんでした。

□ 「谷岡式高畝栽培機」の製作

谷岡氏の農機具への情熱は「プラウ」だけにとどまりませんでした。谷岡氏はたくさんの農機具を改良しましたが、中でも「谷岡式高畝栽培機」は特に優れていました。

それまでの「じゃがいも」や「ビート」は、平らな土面に植えていましたが、これでは土の温度の低い北海道では作物の育ちが良くありません。谷岡氏は何とかならないものかと考えました。

昭和17年(1942年)、谷岡氏は戦争で満州(中国東北部)に行ったとき、そこの人々が盛土にして作物を作っていることを思い出しました。なぜそうするのかを考え、そして、この方法により太陽熱が取り入れやすくなり、水はけがよくなるのだということに気づいたのです。そこで谷岡氏は、土を両側から掘起し、中心を高くして盛土することのできる農機具を製作したのです。

この「高畝栽培機」の導入で、作物の根が深く張るようになり、「じゃがいも」は、1反あたり15俵も多く採れ、農作業も楽になりました。この方法は、その後特許を取ったそうです。

□ 谷岡氏の農機具改良への思い

谷岡氏は、常に農家のことを思い、苦しい農作業をどうしたら能率が上がり、楽にできるのかを考えていました。

少しでも農家の役にたちたい、そのためには自分は誰にも負けない「鍛冶屋」でなければならないという気持ちで、いつも谷岡氏を励ましていました。

谷岡氏の左の手のひらは右の手のひらよりもひとまわり大きくて、堅く、ゴツゴツしていたそうです。このことは、つらく苦しかった努力の積み重ねを何よりも物語っています。

資料名	谷岡寿男資料	区分	農機顕頌之碑(のうきけんしょうのひ)	
		設置場所	真狩市街地(公民館南)	
		年代	昭和	36年頃

写真・スケッチ



説明 (商品名, 製造所, 使用方法, 歴史, 時代背景 など)

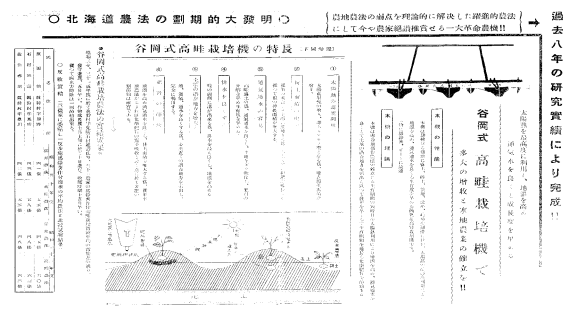
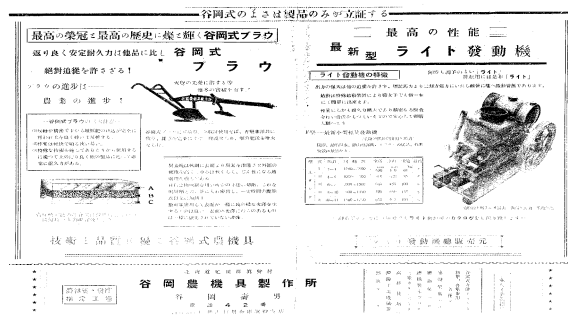
谷岡寿男(タニオカ トシオ)氏は伊達の小西農機で業を修め、昭和5年真狩村に工場を建設し、「寿プラウ」の普及に努めました。昭和11年に十勝で耕起実演天覧の光栄によし、同17年商工省推薦により満州北蘭屯で農機を普及し、昭和21年帰郷して万能トラクター高田圭栽培機を考案するなど、農業の振興に寄与された功績を顕彰して、発起人藤川清助外10名により昭和36年11月23日建立されました。

讃 碑 農機の碑薯の秋より真輝く 汀花 (新田茂一)
顧問 田畑元、石村伊勢吉、秋山勝裕
敷地寄贈 八田昭二
設立発起人 藤川清助 大廣定好、畠中九十九、神山安雄、佐々木正三、
 向井梅太郎、石村芳吉、石村延寿、小泉芳一、長船保雄、池田治春
題字 北海道知事 町村金五
撰文 神山安雄

【碑文】 父徳馬、母ハツ ノ次男明治四十一年四月七日本村御保内ニ生シ幼時洞爺ニ移リ本貫気別ニ生長ス、昭和元年農具ノ改良ニ志シ伊達小西農機ニ入り業ヲ修メ同五年帰郷ニ工場ヲ営ミ農機改良ハ素ヨリ寿プラウノ普及ニ努メ同十一年九月十勝拓殖実習場ニ於テ耕起実習天覧ノ光栄ニ浴ス、同十七年商工省推薦ニ応ヘ満州興安省北蘭屯ニ赴キ多数ノ傭役ト俱ニ北辺振興ノ斯業ニ貢献セシモ終戦ニヨリ引揚ニ際シ万難ニ堪エルコト一年有余翌二十一年裸一貫帰郷シ三度農機ニ心魂ヲ注ギ創意改良ニ励ミ増産ニ寄与スルコト不尠往時ノ万能トラクター製作ハ近代エンジン農機ノ先駆デアリ尚高畦栽培機ハ馬鈴薯耕作専門家ノ賞賛ヲ博シ実用特許新案ヲ得、又愛弟子ノ両親ニ及ブ羊蹄ノ周辺ニ抱擁シ農林省道庁東急ノ指定工場トシテ未だ矍鑠ナリ茲ニ同志相據リ記念碑ヲ建テ永ク功績ヲ傳エントス。

昭和三十六年十一月二十三日建立

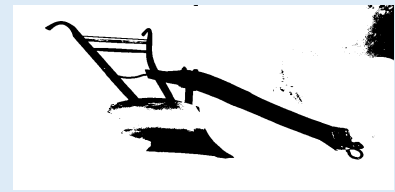
写真・スケッチ



説明 (商品名, 製造所, 使用方法, 歴史, 時代背景 など)

■谷岡式プラウの三大特点(利点)

- (1) 反轉(はんでん)が精密ですから堆肥(たいきゅうひ)の鋤込(すきこみ)が完全に行われ土を良く砕いて反轉する。
- (2) 作業は軽快で頗(すこぶ)る使い易い。
- (3) 特殊な技術を施してありますから使用するに従って土の辻(すべ)りが良く他の製品に比べて非常に耐久力がある。



※炭素焼は軟鋼に表面より炭素を浸透させ外面の硬度を高くし中心は軟くして、しん性になる熱処理を施してある。材料は極軟鋼を用い所定の寸法に切断、これを興炭剤と共に釜に入れ密封し、一定時間の變態点(へんたいてん)以上に加熱す。数町歩使用して表面が一樣に鏡の様な光沢を生ずるものは良い。表面の光沢にむらのあるものは一樣に硬化されていない証拠。

■谷岡式高畦栽培機(高畦栽培農法)

【性能】

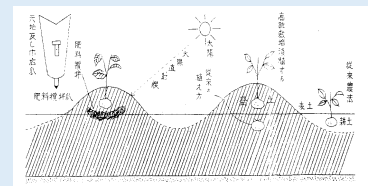
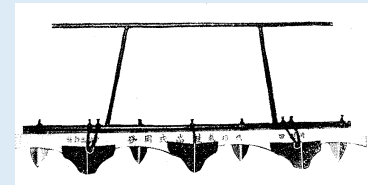
本機は、耕転せる畑地に盛土、碎土(さいど)、整地、沈壓(ちんあつ)、畦切を円滑に行い、太陽熱の最高度利用により地温を高め、通気通水を良くし、生育度を早める簡便な高畦栽培機です。

【理論】

本機は寒冷地畑作農法の弱点たる生育期間の短時日を太陽熱利用により地温を高め、通気通水を良くして土壤の潜在地力を引出し、以って発芽を早くして生育期間を延長し、化学肥料を節約する。

【特長】

- ① 太陽熱の高度利用
太陽直射線の増大、即ちカマボコ型となるため、地表照射面積が増す。
- ② 耕土面積の増大
従来の地表より上部に播種するため、心土までの距離が延長する。従って根の伸長面積が増大する。
- ③ 通気通水の容易
高畦盛土のため、通気通水を良くし、土地をボウ軟化し、肥料の分解を早め、生育度を早める。
- ④ 排水を良くする
畦の両側に溝ができるため、排水を最も良くし、地温を高める。
- ⑤ 土壤の潜在地力を増大す
熱、通気、通水を良くするため、心土近くの潜在地力を引出し、完全に利用する。
- ⑥ 肥料の節約
地温を高め、通気通水を良くし、耕土面積を増大するため、従来平地農法からすれば化学肥料の完全吸収という点において金肥の2割節約は確実である。



【実績成果】

〈昭和30、31年度の三農家における馬鈴薯栽培実績〉

☞ 発芽進度は5日早い。成長度は七月上旬において10日進む。収穫時期15日早い。従って病虫害防除は1回節約できる。

☞ <一反歩当り収量>

	昭和30年度	昭和31年度	比較
従来農法	41~43俵	45~48俵	高畦農法が13~15俵増収
高畦農法	55~58俵	60~63俵	高畦農法が14~15俵増収